欧陽脩が二回目の遷謫の地、知事としておもむいた安徽の滁州も交通の不便な山の中であり、生活も風景も退屈であった。かつ着任そうそう、師という名の娘をなくす。彼が娘をなくしたのは、これで三度目であった。

白髪喪女師

白髪 女の師を喪ふ　　宋・欧陽修

1 吾年未四十　　吾が年は 未だ四十ならざるに
2 三斷哭子腸　　三たび子を哭み 腸を断つ
3 一割痛莫忍　　一たびの割かれ 痛みは忍ぶ莫きに
4 屢痛誰能當　　屢しば痛めば 誰か能く当えんや
5 割腸痛連心　　腸を割けば 痛みは心に連なり
6 心碎骨亦傷　　心砕けて 骨も亦た傷る
7 出我心骨血　　我が心と骨と血を出だし
8 灑爲清淚行　　灑ぎて清き涙の行と為る
9 淚多血已竭　　涙多ければ 血は已に竭き
10 毛膚冷無光　　毛も膚も 冷やかにして光り無し
11 自然鬚與鬢　　自然なり 鬚と鬢と
12 未老先蒼蒼　　未だ老ざるに先ず蒼蒼たり

これは何人も、おしみなく悲哀を流出すべき場合である。欧陽脩もむろん悲哀をのべている。しかし同時に、腸、心、骨、血、涙、毛、膚、鬚、鬢、それらの間にある因果関係が、論理としてとらえられているのに注意したい。

【語釈】蒼蒼…頭髪の白髪がまじるさま。